

# 福祉用具専門相談員研究大会が初開催

## 「福祉用具のちから」伝える全25演題が発表

今年6月17日、福祉用具専門相談員の研究大会が東京国際フォーラムで開かれました。福祉用具専門相談員の資格が誕生して19年。全国福祉用具専門相談員協会と日本福祉用具供給協会が力を合わせ、全国規模で初めての研究大会を開催しました。大会テーマは「伝えよう！福祉用具の力を地域包括ケアシステムにおける福祉用具の役割へ」。当日は、当初の定員を上回るおよそ500人の参加者が押し寄せ、会場は熱気に包まれました。

福祉用具を多くの人  
に知ってもらいたい  
大会テーマの「福祉用具のちから」、サブテーマの「地域包括ケアシステムにおける福祉用具の役割」には、▽地域包括ケアを支える上で、福祉用具が基盤整備の部分を担うこと▽福祉用具なら、いっしょでも利用者を支える力になれる

会テーマである「福祉用具のちから」を発信しようこと、全国から集まった福祉用具専門相談員に呼びかけました。その後、福祉用具専門相談員による口述発表とポスター発表あわせて全25演題が披露されました。

専門職同士で優れた取り組み事例を共有  
トップコーポレーション（大阪府）の福祉用具専門相談員、入江和幸さんは、状態変化などタイミングを見極めた提案で利用者のADL向上や生活範囲の拡大に繋げた事例を発表。80代男性のBさんは骨髄炎で右ひざを曲げられず、さらに脊柱狭窄症の後遺症も合わさって当初は歩行が困難

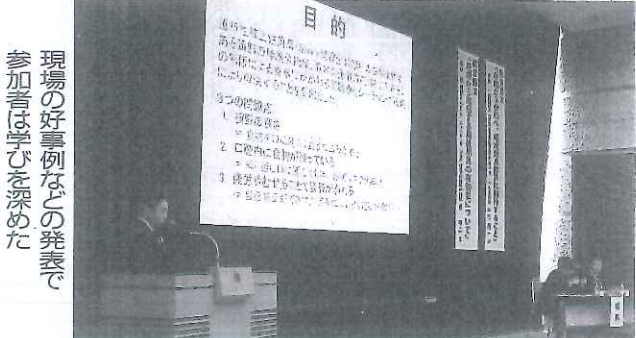
でした。手術を繰り返して、脊柱管狭窄症による症状が緩和されたタイミングで馬蹄型歩行器の導入を提案。訪問リハビリのセラピストと連携し、自宅で歩行訓練を行いました。屋内移動が安定した。屋外移動が安定した。屋外歩行器で2500mの距離を歩けるようになりました。

できることが増える  
と、Bさんの意欲も高まり、趣味の絵画教室に歩いて通いたいという次の目標ができたといいます。ただ、絵画教室は500m以上離れたところにあるため、坂道もあったため、入江さんは「絵画教室へ行く」「絵画教室へ歩いて行く」と目標を2段階に分けることを提案。まずは電動カートを利用することで行けるように支援しました。

念願の絵画教室に行けるようになったことをBさんは喜びながらも、やはり歩いて通いたいという気持ちは持ち続け、今も意欲的に訓練に取り組んでいるといいます。入江さんは状況の変化に注意しながら、「適切なタイミングで歩行器から他点杖への切り替えも提案したい」と話しました。

と福祉用具事業者の業界全体のポトムアップにつながっていきます。  
□述発表の座長を務めた元厚生労働省福祉用具・住宅改修指導官の小林毅さんは、常に発表するつもりで日々の支援に取り組むべきと強調しました。「自分の取り組みがどうしたら聞き手に伝わるか」を意識してほしい。例えば、数値を使うことも一つの手法だと話し、「アクションを起こした結果、対象が変わったのか、変わらなかったのか、それはなぜなのかを一つ一つ真摯に向き合い、知見を積み重ねていってほしい」と今後を期待しました。

参加者の熱気と関係者の努力で成功を収めた初めての研究大会。次回は来年6月16日に日本教育会館（東京都千代田区）で開催される予定です。



現場の好事例などの発表で参加者は学びを深めた